

1 単元名

「たのしいな、ことばあそび」

2 単元目標

- (1) 音節と文字との関係に気付いている。【知識・技能】
- (2) 身近なことを表す語句の量を増やし、語彙を豊かにしている。【知識・技能】
- (3) 長く親しまれている言葉遊びを通して、言葉の豊かさに気付いている。【知識・技能】
- (4) 語句と音節と文字の関係に積極的に関心を持ち、今までの学習を生かして言葉を集めようとしている。【主体的に学習に取り組む姿勢】

3 目標項目との関連

「話す」ステージ3（教科につながる初歩な学習）

c「学校生活や学習場面で必要となる要求表現等を、簡単な日本語で伝える」

4 児童生徒の実態について

本学級は、男子5名、女子6名の合計11名である。国際結婚家庭の児童が6名と、中国にルーツを持つ児童が多数を占めている。

朝教室に入ってくるときは元気よく「おはようございます！」と言え、身体を動かすことや外遊びも好きな児童が多い。また学習に対する意欲も非常に高い児童が多い一方で、特別支援を要する児童（多動傾向等）、また、日本語を話す、聞くことに課題が多い児童も存在する。

特に国際結婚家庭の児童を目標項目で見ると、1 初期指導（前期）cに相当する児童（自己紹介と「トイレに行きたいです」ということができる程度、沈黙期）が1名、2 初期指導（後期）cに相当する児童が3名、3 教科につながる初歩的な学習 bが2名という実態があり、一方で日本語能力には十分な児童が半数ほど学級内にいる、日本語能力に大きな差がある現状である。

5 単元について

本単元は、今後ひらがなを本格的に学習していく児童たちの、語彙を広げる導入にあたるものである。「新しい言葉を知ることは楽しいな」と、「学ぶことは楽しい」と実感をできるように工夫したい。

まずは語彙力アップに力を入れるようにした。ひらがな練習の教材と、本時の学習を組み合わせる中で、絵カードや文カードをもちいてチャンツのように言葉の反復練習をしたり、出てきた言葉の中で「それはなに？」と疑問を持った児童に対しては、ICT機器を活用し写真を見せたりするなど、母語と日本語を繋ぐ手立てをしていきたい。

ことばあつめをしていくときには、特殊音節を動作化しながら、練習していく。「教室の中で探そうなど」動いていい場面を作り、特別支援を要する子どもたちや学級全体が飽きない工夫をしつつ、発言を認めていきながら、温かい雰囲気の中で学習を進めたい。

6 日本語支援について

実態を踏まえ、日本語能力に課題がある児童に対して2つの手立てを考えた。

1つ目は、語彙力の向上を目指し、「絵カード」を用いた語彙の習得、発音の反復練習である。日本語での生活言語を習得していない児童がいたため、まずは多くの語彙に触れさせるのが効果的であると考え、授業の最初にチャンツのように取り組むことにした。

2つ目は、言葉とイメージを繋ぐ「ICT 機器の活用」である。生活言語を習得していても、学習言語や中国での日常生活ではなじみのない言葉も、学習の中では多く存在する。そのため、「〇〇ってなんですか」という言葉が授業内で多く聞かれた。言葉とイメージを繋ぎ、学習や生活でつかう語彙を増やすためにも、ICT 機器の活用が効果的だと考えた。

7 単元構成

時数	【学習活動】	【ポイント】 ○表現支援の視点 ◆バイカルチュラルの視点	【備考】
第1・2時	「ことばあつめをしよう」 ●絵カード、文カード、反対言葉カードなどから1つ選び、チャンツのように反復練習をする。 ●教室など身の回りにあるものから、実際に学習するひらがながついていることばを探し交流する。 (ことばあつめ) ●ことばあつめのなかで、子どもたちから出てきた言葉をもとに、言葉遊びをする。 ●ひらがなプリントで字の練習をする。	○日本語での語彙力をアップさせるために、国語の授業の最初に毎時間、反復練習の時間を設定する。 ◆動物・物の名前は、中国語や英語での言い方も交流をする。様々な言語での表現を認め合える風土づくりを意識する。 ○思いつくものを発表するだけでなく、体を動かしながら、掲示されているものや、学級文庫の本などを手掛かりに言葉集めをさせる。 ○反対から読んだら別の言葉になったり、一つの言葉の中に別の言葉が隠れたりしているものを取り上げる。 ○ICTを使い、姿勢、鉛筆の持ち方、字形が整ってかけている児童の姿やプリントを共有する。	対面にて実施



【他教科、日常生活への関連】

- ・生活言語や学習言語の素地作り（すべての教科につながるもの）

◆バイカルチュラルの視点

英語や中国語での言い方を交流することで、同じものを伝えるのに、様々な言語があることに気付かせるきっかけとする。

8 資料

だいれんにっぽんじんがっこう 1ねんせい おんどく かあど
1 ねん ばん なまえ ①

1	あ り が と う	あ り さ ん に	あ ひ る さ ん が	2	い み つ け た よ	い ち ご を	い ぬ さ ん
3	ひ る ね	う つ か り	う ど う と	4	か い た	え の じ を	え ん び つ で
5	た べ て る よ	お に ぎ り	お お き な	6	10は1と9	10は2と8	10は3と7
					10は4と6	10は5と5	

おまのまへへ おそらんの読みを聞いてあげてほしい。
おそらんの読みを聞いたなら、サツグ欄にその書きを聞いてほしい。（上から月曜まで）

どくしよの まろく（ふん然はんの だいいいも かごう）

音読カード



絵カードを活用した発音練習

9 考察

【成果】

○継続的に「絵カード」による指導を続けてきたことが、他の教科や学校生活の中でも語彙の広がりにつながっている。

○ICTの活用による視覚的情報などの提示は、学習言語の理解を深め、日本語の語彙と児童のイメージを結びつけるために非常に有効であった。

◆中国語や英語で言い表すことを認めることで、日本語力に課題がある児童も生き生きと学習に取り組むことができた。また、その児童の自信と意欲を育てられるだけではなく、様々な言語を認めることで、多様な言語や文化、価値観を受け入れる資質育成のきっかけとなった。

【課題】

○日本語力に課題がある児童には、まだまだ理解・定着している語彙が少ない。特に、学級における学習言語の差は非常に大きいと感じている。また、中国で生活している国際結婚家庭の児童にとって、日本語の言語や文化的なイメージが乏しい。発達段階に合わせて、効果的な指導を継続していく必要があると考えられる。

○「絵カード」の学習は、楽しく意欲的に学習に取り組めるが、定着までに時間がかかる。長期の休みなどの影響で、中国語を生活言語としている児童が学んだことをすっかり忘れてしまうケースも見られる。

【まとめ】

本單元における日本語支援の2つの手立ては、児童が意欲的に楽しみながら効果的に学習に取り組むことができるという点で、非常に有効である。

しかし、定着のための時間の確保することや、発達段階を把握した上で指導や支援を根気強く継続していくことなど、いくつかの課題も挙げられる。

さらに、中国語を主たる生活言語とする家庭では、中国ルーツを大切にしつつ、家庭での学習に取り組むことも必要であると感じている。児童生徒の自己肯定感を育むためにも、家庭生活ではしっかりと中国語を使うべきである。しかし、学校での日本語の学びを継続させるためにも、家庭を巻き込み、家庭でも取り組めるような日本語の効果的な学習方法を模索したい。